

NEW JAPAN  
*P*HILHARMONIC  
SUMIDA, TOKYO

新日本フィルハーモニー交響楽団  
2023/2024シーズン



2023

5

May

6

June

2023/2024 シーズン  
新日本フィルハーモニー交響楽団 5,6月演奏会

Contents

トリフォニーホール・シリーズ/サントリーホール・シリーズ #649 石川亮子	1
メンデルスゾーン:交響曲第2番 変口長調 op.52「讃歌」 歌詞対訳	10
すみだクラシックへの扉 #15 小室敬幸	15
楽員ストーリーズ ③④ 山川永太郎(トランペット)	23
NJP from Inside	24
NJP 6月、7月公演 柴田克彦の鑑賞ポイント	27
2023/2024シーズン 定期演奏会プログラム	28
室内楽シリーズ	35
「パトロネージュ・システム」のご案内	42

■特別支援企業

オリックス  
in 鹿島  
CCC  
大和証券  
東京東信用金庫  
NOMURA  
フジサンケイグループ  
三井住友銀行

■特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

特別支援企業/団体は、新日本フィルの運営を支援しています。

〈コンサートの感想をお寄せください〉

演奏会終了後1週間以内にご回答いただいた方の中から、抽選で10名様に新日本フィルオリジナルグッズをプレゼント!

QRコードを読み込み、WEBにてお答えください。プレゼントの当選者にはメールにてご連絡させていただきます。  
culture@njp.or.jpからのメールが受信できるようご設定をお願い致します。



<https://forms.gle/nzYkJLAuZG1tfYY36>

〈ご来場のお客様へのお願い〉



Triphony Hall Series  
Suntory Hall Series  
2023-2024 Season  
#649

5.13 [土]  
トリフォニーホール・シリーズ  
新日本フィルハーモニー交響楽団  
トリフォニーホール・シリーズ 第649回定期演奏会  
2023年5月13日(土) 14時00分  
すみだトリフォニーホール

5.15 [月]  
サントリーホール・シリーズ  
新日本フィルハーモニー交響楽団  
サントリーホール・シリーズ 第649回定期演奏会  
2023年5月15日(月) 19時00分  
サントリーホール

●シベリウス (1865-1957)

ヴァイオリン協奏曲 ニ短調 op.47 \*

Jean Sibelius: Violin Concerto in D minor, op.47 \*

約35分

- I. Allegro moderato
- II. Adagio di molto
- III. Allegro, ma non tanto

—— 休憩20分 ——

●メンデルスゾーン (1809-47)

交響曲第2番 変口長調 op.52「讃歌」 \*\*

Felix Mendelssohn Bartholdy: Symphony No.2 in B-flat major, op.52 "Lobgesang" \*\*

約60分

- |                               |                             |
|-------------------------------|-----------------------------|
| I. Sinfonia                   | VI. Tenor solo              |
| II. Chor und Sopran solo      | VII. Chor                   |
| III. Recitativo (Tenor solo)  | VIII. Choral                |
| IV. Chor                      | IX. Sopran solo, Tenor solo |
| V. Sopran I und II solo, Chor | X. Schlußchor               |

[指揮] 沼尻竜典

Ryusuke Numajiri, Conductor

[ヴァイオリン] ユーハン・ダーレネ \*

Johan Dalene, Violin \*

[ソプラノI] 砂川涼子 \*\*

Ryoko Sunakawa, Soprano I \*\*

[ソプラノII] 山際きみ佳 \*\*

Kimika Yamagiwa, Soprano II \*\*

[テノール] 清水徹太郎 \*\*

Tetsutaro Shimizu, Tenor \*\*

[合唱] 栗友会合唱団、新国立劇場合唱団 \*\*

Ritsuyukai Choir & New National Theatre Chorus, Chorus \*\*

[合唱指揮] 富平恭平 \*\*

Kyohei Tomihira, Chorus Master \*\*

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙/伝田正秀

Munsu Choi & Masahide Denda, Concertmaster

■主催:公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催:すみだトリフォニーホール [5/13公演]

■助成:文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(創造団体支援))  
独立行政法人 日本芸術文化振興会  
公益財団法人三菱UFJ信託芸術文化財団

アラム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。  
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。





沼尻竜典 [指揮] Ryusuke Numajiri, Conductor

神奈川県フィルハーモニー管弦楽団音楽監督。トウキョウ・ミタカ・フィルハーモニア音楽監督、びわ湖ホール桂冠芸術監督。ベルリン留学中の1990年、ブザンソン国際指揮者コンクールで優勝。以後、ロンドン響、モントリオール響、ベルリン・ドイツ響、ベルリン・コンツェルトハウス管、フランス放送フィル、トゥールーズ・キャピトル管、ミラノ・ジュゼッペ・ヴェルディ響、シドニー響、チャイナ・フィル等、世界各国のオーケストラに客演を重ねる。国内外で数々のポストを歴任。ドイツではリューベック歌劇場音楽総監督を務め、オペラ公演、劇場専属のリューベック・フィルとのコンサートの双方において多くの名演を残した。ケルン歌劇場、バイエルン州立歌劇場、ベルリン・コーミッシェ・オーパー、パーゼル歌劇場、シドニー歌劇場等へも客演。16年間にわたって芸術監督を務めたびわ湖ホールでは、ミヒヤエル・ハンペの新演出による『ニーベルングの指環』を含め、バイロイト祝祭劇場で上演されるワーグナーの主要10作品をすべて指揮した。14年には横浜みなとみらいホールの委嘱でオペラ『竹取物語』を作曲・初演、国内外で再演されている。17年紫綬褒章受章。



© Mats Bäcker

ユーハン・ダーレネ [ヴァイオリン] Johan Dalene, Violin

2000年スウェーデンのノールショピング生まれ。4歳でヴァイオリンを始める。2018年ノルウェーの音楽家育成プログラム〈クレッシェンド〉でジャーニーヌ・ヤンセン、レイフ・オヴェ・アンズネス、ギドン・クレーメル の指導を受けた。

2019年カール・ニールセン国際コンクールで優勝。2019～22年のBBCニュー・ジェネレーション・アーティスト、2021/22シーズンのECHOライジング・スターに選出され、ウィーン・コンツェルトハウス、フィルハーモニー・ド・パリ、アムステルダム・コンセルトヘボウを含むヨーロッパの主要コンサートホールで公演を行う。また、スウェーデン放送響、エーテボリ響、BBC響、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、チェコ・フィル、サンフランシスコ響、ロンドン・フィルをはじめとするオーケストラと共演。BISレコードと専属契約を結び、これまでに3枚のCDをリリース。

現在ストックホルム音楽大学でペール・エノクソンに師事、またジャーニーヌ・ヤンセンの指導を受けている。

使用楽器はアンデシュ・スヴェオース公益基金より貸与されている1736年製ストラディヴァリウス。



©Yoshinobu Fukaya

砂川涼子 [ソプラノ] Ryoko Sunakawa, Soprano

可憐な舞台姿と聴くものの心を震わせる歌声で高い人気を誇るソプラノ歌手。1998年 第34回日伊声楽コンクール優勝、2000年 第69回日本音楽コンクール第1位、05年 第16回五島記念文化賞・オペラ新人賞、06年 第12回リッカルド・ザンドナイ国際声楽コンクールでザンドナイ賞など、数々の受賞歴を誇る。

武蔵野音楽大学卒業、同大学大学院修了。その後イタリアでも研鑽を積む。2000年 新国立劇場『オルフェオとエウリディーチェ』エウリディーチェで本格的オペラデビューを果たす。その後、数々のオペラ公演に出演を続け、その実力に裏打ちされた歌唱は常に高い評価を得ている。とりわけ『ラ・ボエーム』のミミは、“歌唱・容姿ともに理想のミミ”と絶賛されている。また、活動の場はオペラにとどまらず、国内主要オーケストラにも招かれており、テレビ、ラジオへの出演も数多い。NHKニューイヤーパーラコンサートには、02年に初登場以来出演を重ねている。藤原歌劇団団員。武蔵野音楽大学非常勤講師。沖縄県宮古島出身。



山際きみ佳 [メゾ・ソプラノ] Kimika Yamagiwa, Mezzo-Soprano

愛知県立芸術大学大学院修了。野村財団の助成を受け渡伊、ダニエラ・バルチェッローナ、アレッサンドロ・ヴィティエッロの各氏に師事。トリエステ・ヴェルディ歌劇場『ボリス・ゴドゥノフ』フォードル役にてイタリアデビューを果たし、温かい声で信頼感のある歌手と評され、2021年に同歌劇場『セビリアの理髪師』ロジーナ役に抜擢される。第1回ヴィンチェンツォ・ベッリーニ国際声楽コンクールに入賞し、カタール・マッシュモ・ベッリーニ歌劇場にてソリストとして出演。オペラでは『フィガロの結婚』ケルビーノ、『ヘンゼルとグレーテル』ヘンゼル、『ディドとエネアス』ディド等を演じ、2024年3月びわ湖ホール『ばらの騎士』にオクタヴィアン役で出演予定。また、ベートーヴェン「第九」、モーツァルト「レクイエム」、ヴィヴァルディ「グローリア」、ヘンデル「主は言われた」等のソリストも務める。びわ湖ホール声楽アンサンブル・ソロ登録メンバー。



## 清水徹太郎 [テノール] Tetsutaro Shimizu, Tenor

京都市立芸術大学卒業、同大学院修了。第33回飯塚音楽コンクール第1位、第82回日本音楽コンクール入選他多数上位入賞。文部科学大臣賞、平成29年度坂井時忠音楽賞、平成30年兵庫県芸術奨励賞他多数受賞。室内楽・宗教曲では「天地創造」「千人交響曲」「メサイア」「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」「クリスマス・オラトリオ」等多数のソロを務める。オペラでは『カルメン』ドン・ホセ役、『ラインの黄金』のローゲ役、『エフゲニー・オネーギン』トリケ役、『ボリス・ゴドゥノフ』聖愚者役、『マイスタージンガー』ダフィット役等は特に高評を得た。エッシェンバッハ指揮「千人の交響曲」、チョン=ミョンフン指揮「第九」のソリスト等、国内外で活動を続けている。兵庫県音楽活動推進会議委員。びわ湖ホール声楽アンサンブル・ソロ登録メンバー。京都市立芸術大学、大阪音楽大学、滋賀大学各講師。新日本フィルとは定期演奏会#610「讃歌」、#642「カルミナ・ブラーナ」に続き3回目の共演となる。

## 栗友会合唱団 Ritsuyukai Choir

栗山文昭を音楽監督兼指揮者とする4つの混声合唱団、6つの女声合唱団と2つの男声合唱団で構成。各団は演奏会、演奏旅行、レコーディングなどを行いながら「栗友会」としても活動している。2022年1月25日サントリーホールにて、合唱オペラ『少年少女恐竜記』（台本・詩・演出：加藤直／作曲：寺嶋陸也）を委嘱・初演した。

近年の主な新日本フィルとの共演は、「第九」特別演奏会（1993年の初出演以来、2019年まで計21年連続出演／コロナ禍を挟み2022年出演再開）、ハーディング指揮・プリテン「戦争レクイエム」・マーラー「交響曲第8番（千人の交響曲）」、上岡敏之指揮・オルフ「カルミナ・ブラーナ」・マーラー「交響曲第2番（復活）」、ジャッド指揮・ロッシェニ「スターバト・マーテル」、イエアンニン指揮・ハイドン「四季」、ピリー指揮・ブラームス「ドイツ・レクイエム」。

## 新国立劇場合唱団 New National Theatre Chorus

新国立劇場は、オペラ、バレエ、ダンス、演劇という現代舞台芸術のためのわが国唯一の国立劇場として、1997年10月に開場した。新国立劇場合唱団も年間を通じて行われる数多くのオペラ公演の核を担う合唱団として活動を開始。新国立劇場で上演されるシーズン公演の出演に加え、2007年からは劇場外からの出演依頼の声に応じて外部公演への出演を開始した。個々のメンバーは高水準の歌唱力と演技力を有しており、合唱団としての優れたアンサンブル能力と豊かな声量は、公演ごとに共演する出演者、指揮者、演出家・スタッフはもとより、国内外のメディアからも高い評価を得ている。

## 富平恭平 [合唱指揮] Kyohei Tomihira, Chorus Master

東京生まれ。東京藝術大学音楽学部指揮科卒業。指揮を高関健、田中良和、小田野宏之の各氏に師事。群馬交響楽団、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、千葉交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、東京ニューシティ管弦楽団、東京交響楽団を指揮している。洗足学園大学ピアノ科非常勤講師。オペラでの活動が多く、多数の公演で副指揮者、合唱指揮者、コレペティトゥア、ピアニスト、プロンプターなどオペラに関わるあらゆる仕事をつとめている。

2006年4月から2010年3月まで東京二期会専属音楽スタッフとして活動し、2010年8月には新国立劇場音楽スタッフ、2019年4月には新国立劇場合唱団指揮者に就任。

作曲家には十人十色の生き様がある。ロマン派後半における最大の交響曲作家のひとりとして評され、91歳の長寿であったにもかかわらず、59歳の年に第7番を書いて以降、亡くなるまで沈黙を続けたシベリウス。一方、ロマン派前半において、恵まれた環境のなかで早くから才能を開花させたメンデルスゾーンは、バッハの「マタイ受難曲」を復活上演し、ライプツィヒ・ゲヴァントハウスの指揮者に就任。ライプツィヒ音楽院を創設する等、今日までつながる音楽文化の数々に貢献し、38歳で駆け抜けるようにこの世を去った。

「芸術は長く、人生は短し」。先日亡くなった坂本龍一が好んだ一節だと言う。YMOのテクノ・ポップ。「ラストエンペラー」をはじめとする、数々の映画音楽。「世界のタケミツ」に続く日本の作曲家のひとりが、「世界のサカモト」だった。今もその音楽は、その時の記憶とともに鮮明なまま残っている。

### ■ シベリウス：ヴァイオリン協奏曲 二短調 op. 47

19世紀後半に台頭した国民楽派において、交響詩「フィンランディア」の成功によって、フィンランドの国民的作曲家となったジャン・シベリウス(1865~1957)。しかしながら作品のなかで直接的に民謡や舞曲が用いられることは少なく、「カレワラ」等の民族伝承に基づいた交響詩とともに、シベリウスが取り組んだ重要なジャンルは、音による完結した世界としての交響曲であった。

若き日にシベリウスがヴァイオリニストになることを夢みたことは、よく知られる。シベリウス唯一の協奏曲である本作は、交響曲で言うと第2番と第3番の間、具体的には1903年から翌年にかけて作曲されている。ベルリンで当時のヴィルトゥオーゾ・ヴァイオリニスト、ヴィリー・ブルメスターと出会ったシベリウスは、彼をソリストに想定して協奏曲を書いた。ところが1904年2月8日の初演は、別の奏者によって行われて失敗。大幅に書き直されて、1905年に現在のかたちで完成された。改訂に際しては、1905年1月にベルリンで聴いた、ブラームスのヴァイオリン協奏曲の影響が少なからずあったと言われる。すなわち作品は、ヴィルトゥオーゾ的な過度な装飾を排した、より交響的なものに仕立て直されたのだった。

**第1楽章**はきわめて幻想的な音楽。ソナタ形式により、冒頭の独奏ヴァイオリンの旋律に含まれる下行5度が楽章全体の核となる。通常は楽章の最後に置かれるカデンツァが真ん中に置かれ、展開部としての役割を担う(メンデルスゾーンの協奏曲と同様のアイデアによることが指摘されている)。

**第2楽章**はわずか69小節。ロマンツァ風の美しい歌による。

**第3楽章**は躍動感あふれるフィナーレ。ティンパニと弦楽器が刻むリズムに乗って、独奏ヴァイオリンが鮮やかに疾走していく。

[楽器編成]ヴァイオリン独奏、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部。

### ■ メンデルスゾーン：交響曲第2番 変ロ長調 op. 52「讃歌」

古典的な書法を守りながら、そのなかにロマン派の息吹が香るフェリックス・メンデルスゾーン(1809~47)の音楽。本日演奏される「讃歌」は、番号付けされたメンデルスゾーンの5曲の交響曲のうち、初版の年と言えば2作目に当たる。なおかつ作品が完成された年と言えば4作目であり、しかも初版譜に記された元々のタイトルは、「讃歌——聖書の言葉に基づく交響曲・カンタータ Lobgesang: Eine Symphonie-Kantate nach Worten der Heiligen Schrift」というものであった。

1840年6月、ゲーテンベルクの活版印刷発明400年を祝して、ライプツィヒで記念祭が行われることになった。その際、市から委嘱を受けてメンデルスゾーンが書いた1作が「讃歌」である。初演は1840年6月25日、聖トーマス教会(バッハが長年カントルを務めたことで有名)で、作曲者自身の指揮によって行われた。同年9月23日には、イギリス・パーミンガムの音楽祭で、英語で上演。しかしながらメンデルスゾーンは満足することなく、現在の第3曲、第6曲、第9曲について大幅に改訂を行い、他の曲にも手を入れていった。そして同年12月3日と16日、ライプツィヒのゲヴァントハウスで上演され(後者には、ザクセン国王フリードリヒ・アウグスト2世も臨席した。現在演奏されているのは、ほぼこの改訂稿である)、1841年の初版も国王に献呈されている。

「讃歌」は演奏時間で60分を超える大曲で、全10曲からなる。オーケストラによる第1曲のシンフォニアが、いわゆる伝統的な交響曲の第1~第3楽章に相当。第2曲からはソリストと合唱が加わったカンタータとなる。別の言い方をすれば、「讃歌」は、16年前に初演されたベートーヴェンの「第九」と同じ構成によりつつ、さらにフィナーレ楽章を長大なカンタータとすることで、交響曲とカンタータを一体にした(タイトルの「交響曲・カンタータ」は、その意味である)、大胆な野心作であることがわかるだろう。

第2曲以降についてメンデルスゾーンは、ルター訳のドイツ語聖書から、旧約聖書の「詩編」を中心に自ら歌詞を編纂した(いわゆる「ルネサンス三大発明」のひとつ、活版印刷によって人々が触れる知識や情報が飛

聖書の言葉による  
交響曲カンタータ

活版印刷400年を  
記念して

第九を意識した  
野心作

神への「讃歌」

シンフォニー作家として

作曲、初演の経緯

曲の構成と  
音楽の特徴



躍的に増え、やがて宗教改革が起こったことは言うまでもないだろう)。歌詞を見ると最初と最後、すなわち第2曲の冒頭と第10曲の終わりに、同じ「詩編」第150編の最後の言葉、「すべて息するものよ、主を讃えよ!」が置かれており、この「交響曲・カンタータ」が神への讃美を壮大に奏でる「讃歌」であることを示している。

**第1曲**はオーケストラによるシンフォニア。冒頭、トロンボーン3本で演奏されるメロディーが全曲を貫くモットー主題。それを序奏として、第1楽章(潑刺としたソナタ・アレグロ楽章)的、第2楽章(優美なスケルツォ楽章)的、第3楽章(コラル風が始まる緩徐楽章)的な部分が続く。ここまでで、全体の約3分の1の時間を要する。

**第2曲**からは、いよいよ合唱が登場。モットー主題が「すべて息するものよ、主を讃えよ!」の歌詞とともにカノンで歌われ、対位的に絡み合いながら盛り上がっていく。後半は、ソプラノ独唱と女声合唱を組み合わせた崇高な響きとなる。

**第3曲**はテノール独唱と弦楽合奏による。メランコリックなレチタティーヴォに続いて、アリアでは「主は私たちの涙を慰めて下さる」と歌われる。

**第4曲**は前曲と同じ雰囲気のまま、合唱が「神は私たちの涙を数えていて下さる」と歌う。

**第5曲**は初演を聴いたシューマンが「ラファエロの聖母の天国への眼差しのように」と評した、美しく感動的な音楽。ソプラノ二重唱に合唱も加わりながら、「私は主を待ち焦がれていた」と憧れに満ちて歌われる。

**第6曲**のテノール独唱は、一転してドラマティックな表情を持つ。暗闇のなかをさまよい、「夜はもう去って行くのか?」と一度ならず問いかけると、ソプラノ独唱が「夜は去ったのだ!」と力強く歌う。

**第7曲**は前曲の夜明けを受けて、合唱が昼、すなわち光の勝利を輝かしく歌い上げる。

**第8曲**は祈りの音楽。ルター派の有名なコラル「いざやともに」が、前半は合唱のみのア・カペッラで、後半はオーケストラも加わって歌われる。

**第9曲**はテノールとソプラノの二重唱で、抒情的で憂いをおびた音楽となる。

**第10曲**の合唱は短調で厳かに開始される。やがて霧が晴れていくように、合唱によるフーガが浮かび上がっていくと、冒頭のトロンボーンによるモットー主題が回帰。モットー主題が「すべて息するものよ、主を讃えよ!」の歌詞とともに高らかに歌われて終わる。

[編成]フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、ソプラノ独唱2、テノール独唱、混声合唱、オルガン、弦楽5部。

## 「あした」は、ナニイロ?

鹿島のしごと。

それは「あした」をつくること。

人と自然と向き合って、

よりよい毎日をつないでいくこと。

暮らしを描く、ものづくり。

無限の創造力で、彩り豊かな未来へ。

100年をつくる会社

in 鹿島





SHARE LOUNGE

## 発想が生まれ、シェアする場所

シェアラウンジは、ラウンジの居心地と本による提案、オフィスの機能性を兼ね備え、訪れた人に「新しい発想を提供する場所」です。

新たな発想は心を躍らせ、生活を明るくし、世界をほんの少し良い場所にしてくれるもの。働く人だけでなく、お子さまや学生、主婦の方など、すべての人たちが日々の暮らしの中で、発想を必要としています。

ここに集まる多様な人々が風景をつくり、そこにいて刺激がもらえたり、本からインスピレーションを得ることもできる。ある時は居心地の良いカフェやバーとして、またある時は体験を促すイベントスペースとして。

新たな発想を生む、たくさんの仕掛けが詰まった空間です。

SHARE LOUNGE by Culture Convenience Club

### [SHARE LOUNGE]

代官山 蔦屋書店/渋谷スクランブルスクエア/下北沢/亀戸ほか、全国に順次拡大中。  
最新の店舗一覧はアプリをご覧ください。



SHARE LOUNGE  
公式アプリ

App  
Store



Google  
Play



SUMIDA  
TOBIRA of classic  
2023-2024 Season  
#15

6.9 [金] 10 [土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 すみだクラシックへの扉 第15回  
2023年6月 9日(金) 14時00分 すみだトリフォニーホール  
6月10日(土) 14時00分 すみだトリフォニーホール

●メンデルスゾーン (1809-47)

劇音楽『夏の夜の夢』序曲 op. 21

Felix Mendelssohn Bartholdy: Overture to "Ein Sommernachtraum", op. 21

約10分

●モーツァルト (1756-91)

交響曲第36番 八長調 K. 425「リンツ」

Wolfgang Amadeus Mozart: Symphony No. 36 in C major, K. 425, "Linz"

I. Adagio - Allegro spiritoso II. Andante III. Menuetto IV. Presto

約25分

—— 休憩20分 ——

●パッヘルベル (1653-1706)

カノン ニ長調

Johann Pachelbel: Canon in D major

後半 約50分

●ヘンデル (1685-1759)

歌劇『セルセ』HWV 40より「オンブラ・マイ・フ (なつかしい木陰)」

George Frideric Handel: 'Ombra mai fù' from "Serse", HWV 40

歌劇『リナルド』HWV 7より「涙の流れるままに」

George Frideric Handel: "Lascia ch'io pianga" from "Rinaldo", HWV 7

●モーツァルト

歌劇『フィガロの結婚』K. 492より 序曲、「恋とはどんなものかしら」

Wolfgang Amadeus Mozart: Overture and "Voi che sapete" from "Le nozze di Figaro", K. 492

歌劇『ポントの王ミトリダテ』K. 87 (74a)より「執念深い父がやってきて」

Wolfgang Amadeus Mozart: "Venga pur, minacci e freme" from "Mitridate, rè di Ponto", K. 87(74a)

モテット「アヴェ・ヴェルム・コルプス」K. 618

Wolfgang Amadeus Mozart: Ave verum corpus, K. 618

●グルック (1714-87)

歌劇『オルフェオとエウリディーチェ』より「精霊の踊り」、「エウリディーチェを失って」

Christoph Willibald Gluck: Dance of the Blessed Spirits and "Che farò senza Euridice" from "Orfeo ed Euridice"

[指揮] デリック・イノウエ

Derrick Inouye, Conductor

[コンサートマスター] 西江辰郎

Tatsuo Nishie, Concertmaster

[カウンターテナー] 藤木大地

Daichi Fujiki, Countertenor

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞

Mai Tategami, Assistant Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール

■特別協賛：オリックス株式会社

公益財団法人オリックス宮内財団

■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(創造団体支援))

独立行政法人 日本芸術文化振興会

アラム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。  
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

オリックス株式会社  
公益財団法人 オリックス宮内財団



文 化 庁



© satoru mitsuta

### デリック・イノウエ [指揮] Derrick Inouye, Conductor

デリック・イノウエは、メトロポリタン歌劇場、ニューヨークのセントルークス管、ニューヨーク・シティ・オペラ、ロンドンのフィルハーモニア管、モンテカルロ・フィル、ニュルンベルク・オペラといった名だたる楽団と共演するという輝かしい経歴を持つ。メトロポリタン歌劇場とは長きに渡り良好な関係を築いている。また、ニュルンベルク・オペラの第1カペルマイスター時代、フィリップ・グラスのオペラ『アッシャー家の崩壊』の初演を含む数多くのオペラを手がけた。その他、ヨーロッパ、北米、日本の数多くのオーケストラと共演。夏のヴェルビエ音楽祭では、2022年に17回目のプリンシパル・スタッフコンダクターを務めたほか、ジョージアで2022年に開催されたツィナングリ音楽祭でも同様のコンダクターを務めた。

1985年にヴィットリオ・グイ指揮コンクールで優勝、その後、フランコ・フェラーラ、小澤征爾、ラインズドルフ等に師事。初期の指揮法は桐朋学園大学音楽学部にて小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明の下で学んだ。



© hiromasa

### 藤木大地 [カウンターテナー] Daichi Fujiki, Countertenor

2017年、オペラの殿堂・ウィーン国立歌劇場にライマン『メデア』へロルド役で鮮烈にデビュー。東洋人のカウンターテナーとして初めての快挙で、大きなニュースとなる。2012年、第31回国際ハンス・ガボア・ベルヴェデーレ声楽コンクールにてハンス・ガボア賞を受賞。同年、日本音楽コンクール第1位。2013年、ボローニャ歌劇場にてグルック『クレーリアの勝利』マンニオ役でヨーロッパデビュー。国内では、主要オーケストラとの公演や各地でのリサイタルがいずれも絶賛を博している。2021年、3枚目のアルバム『いのちのうた』がキングインターナショナルよりリリースされた。新国立劇場2022/23シーズン開幕公演では、ヘンデル『ジュリオ・チェザレ』トロメオ役で出演。バロックからコンテンポラリーまで幅広いレパートリーで活動を展開し、デビューから現在まで話題の中心に存在する、日本が世界に誇る国際的なアーティストのひとりである。

洗足学園音楽大学客員教授。横浜みなとみらいホール プロデューサー 2021-2023。

Official Website : [www.daichifujiki.com](http://www.daichifujiki.com)

新国立劇場運営財団情報センターから「バロック・オペラ ― その時代と作品」が出版されたのが2014年のこと。前書きにあたる部分に「今日“バロック・オペラ”が上演される機会は稀です」と書かれていた。実際、1997年に開場した新国立劇場においては、この冊子が出るまでの間に上演されたバロック・オペラは3プロダクションに過ぎなかったのだ。

とはいえ1993年から二期会が数年に一度、1995年からは北とびあ国際音楽祭がコンスタントに（ただしモーツァルトも含まれている）、2004年からは神奈川県立音楽堂がたびたび取り上げてきたことを鑑みれば、2014年でも「稀」というのは、やや言いすぎだったかもしれない。むしろ肌感覚で感じるのは、この10年弱でバロック・オペラを観るモチベーションが変わったことだ。「希少だから」という物珍しさより、「最も刺激を得られる分野だから」という空気感が強まったことを感じずにいられない。

### ■メンデルスゾーン：劇音楽『夏の夜の夢』序曲 op. 21

今でこそ西洋音楽の主なレパートリーといえば、同時代ではなく過去の音楽だが、それは19世紀後半に確立された。大雑把に言えば18世紀後半からのおよそ100年で、様々な要因の積み重ねによって、新しくないけれども演奏する価値のあるものをクラシカルな音楽 ― つまり「クラシック音楽 classical music」と呼ぶようになったのだ。1838年以降、何度か「歴史コンサート」という連続演奏会を企画して、時系列で音楽スタイルの変遷を聴かせたフェリックス・メンデルスゾーン（1809～47）も価値観の醸成に寄与した音楽家のひとりである。

戯曲『夏の夜の夢』を読んだ印象をもとに書かれた本作は、17歳の若書きであるにもかかわらず早くから評価された。その一因となったのは、ウィリアム・シェイクスピア（1564～1616）のような古典を題材にしていたことに加え、古典派ベートーヴェンの「コリオラン」のような演奏会用序曲の系譜を継いでいたからでもあるのだろう。構成はソナタ形式に沿っているが、物語に登場する3つのグループ「妖精たち」「貴族たち」「職人たち」を様々なメロディで描き分けているのが面白い。

[楽器編成] フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、チューバ、ティンパニ、弦楽5部。

“クラシック”の価値観を育み▶

17歳の才能の輝き▶



## ■ モーツァルト：交響曲第36番 ハ長調 K. 425「リンツ」

前述した「バロック・オペラ ― その時代と作品」では「オペラの誕生からモーツァルトが活躍する以前のグルックやピッチェニのオペラまで」が取り扱われているが、裏を返せばヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~91)はオペラのレパートリーとして長らく演奏され続けてきたからこそ、ひとつの切れ目として有効になるわけだ。言い換えればバロック・オペラは「バロック時代のオペラ」というよりも「モーツァルトが活躍する以前」のオペラを指す言葉としても使われているのである。

作曲の経緯 ▶ オペラ「後宮からの誘拐」を作曲した1782年、モーツァルトは結婚。新妻コンスタンツェを父と姉に紹介すべく翌年、ザルツブルクに里帰りした。ウィーンに戻る道すがら立ち寄ったリンツで、歓待してくれた伯爵の求めに応じて書かれたのがこの「リンツ」である。全4楽章だが、第3楽章を除くと3年後の交響曲第38番の前身にあたる作品に視えてくる。

曲の構成と音楽の特徴 ▶ **第1楽章** ソナタ形式。ゆったりとした序奏を抜けると、颯爽とした第1主題が続いてゆく。短調ではじまる第2主題は、ちょっとドラマティック。爽やかだが起伏に富んだ楽章である。

**第2楽章** ソナタ形式による緩徐楽章。第2主題が短調ではじまるのが、第1楽章と共通している。

**第3楽章** 三部形式による舞曲楽章。一聴したところシンプルなメヌエットだが、フレーズが規則的ではないのが面白い。

**第4楽章** ソナタ形式。プレスト(とても速く)で駆け抜けていくが、テクスチュアの多層性、長調・短調、強弱の違いなどによってコントラストがつけられていくので一本調子になることがない。

[楽器編成]オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部。

## ■ バッヘルベル：カノン 二長調

現在では、最も有名なクラシック音楽のひとつといえるが、実は楽譜が初めて出版されたのは1919年のこと(!?)。広く演奏されるようになったのはイ・ムジチ合奏団などのレコードによってバロック音楽が世界中で人気を博すようになった1950~60年代より後だった。オペ

60年代からの  
バロック人気 ▶

ラよりは早かったが、バロックの器楽も復興されたものなのだ。

声部のやり取りの妙を ▶ ヨハン・パッヘルベル(1653~1706)はバッハよりも30歳ほど年上のドイツ人作曲家で、存命中はオルガニストとしても高名だった。カノンというのは、1つの旋律を複数の楽器が少しずつずらして演奏することで成り立つように作曲する技法。パッヘルベルの「カノン」では、3つのヴァイオリンパートが2小節ずつずれて演奏されていく。カノンは通常、伴奏がつかないことの方が多いのだが、この作品では繰り返される2小節の通奏低音を伴っている。

## ■ ヘンデル：

歌劇「セルセ」HWV 40より「オンブラ・マイ・フ(なつかしい木陰)」  
歌劇「リナルド」HWV 7より「涙の流れるままに」

イギリスで成功を収めた  
イタリア語オペラ ▶ ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル(1685~1759)といえば、ヨハン・セバスティアン・バッハと同年に生まれたドイツの作曲家……というイメージが日本では強いが、イタリアに留学してオペラの作曲法を学び、1712年以降はロンドンに移住。1727年にはイギリス国籍を取得したので、英国を代表する作曲家でもあるのだ。ところが1728年にヘンデルらを風刺した「乞食オペラ」(ジョン・ゲイ台本)が大成功を収めたことで、英国におけるイタリア語によるオペラの人気は低下してしまう……(ヘンデルも1740年頃を境にして創作の中心を英語歌詞によるオラトリオに切り替え、代表作となったオラトリオ「メサイア」は1741年に作曲された)。

どちらのアリアも当時は、去勢により声変わりを防いだ男性歌手カストラートによっても歌われていた曲であったことから、現在では女性歌手のみならずカウンターテナーのレパートリーにもなっている。

「オンブラ・マイ・フ」は1738年に初演されたオペラ「セルセ」のアリア。序曲とレチタティーヴォの後に「これほどまでに心地良く、優しく愛しい、木陰はかつてなかった」と主人公のペルシア王セルセ(クセルクセス1世)が歌いだす。現在では抜粋されて歌われるだけでなく、器楽曲としても演奏される機会が多いけれども、オペラ自体は1924年に蘇演されるまで長らく忘れ去られていた。今日では「ジュリオ・チェザレ(ジュリアス・シーザー)」と並ぶ、ヘンデルの代表的な

オペラとみなされている。

「涙の流れるままに」は1711年に初演されたオペラ「リナルド」の aria。11世紀末の第1回十字軍のエルサレム遠征のなか、敵軍にさらわれ、エルサレム王アルガンテに求愛されるアルミレーナ（英雄リナルドのフィアンセ）が、貞節を守ろうと歌う。ヘンデルにとって初めてロンドンで初演されたオペラで、彼は全3幕をおよそ2週間で完成させている……というのも、多くの楽曲を過去の自作から流用したからだ。この「涙の流れるままに」も、1705年に初演された「アルミーラ」第3幕におかれた「サラバンド」を転用している。

### ■ モーツァルト：

歌劇『フィガロの結婚』K. 492より

序曲、「恋とはどんなものかしら」

歌劇『ポントの王ミトリダーテ』K. 87 (74a) より

「執念深い父がやってきて」

新たに発見された魅力 ▶

既に触れたように通常、モーツァルトのオペラはバロック・オペラとはみなされない。だが18世紀当時の演奏様式に対する研究が進んだことで「古楽」や「HIP (Historically Informed Performance)」などと呼ばれるアプローチが広がったことで、モーツァルトのオペラに対するイメージも大きく変わった。流麗で心地よいだけでなく、機知に富んだオペラの内容に相応しい刺激に満ちた音楽であることが分かりやすく伝わってくるようになったのだ。

ダ・ポンテ台本の  
名作から2曲 ▶

数多く残されたモーツァルトのオペラのなかで、最高峰に位置づけられるのがロレンツォ・ダ・ポンテ (1749~1838) が台本を書いた3つの作品。そのうち最初に作曲されたのが1786年に初演された「フィガロの結婚」だ。原作はフランスの劇作家ボーマルシェ (1732~99) が王侯貴族を風刺した同名作で、ダ・ポンテは絶妙な感覚で毒抜きして台本化。そのお陰で神聖ローマ帝国ヨーゼフ2世のもとでも上演できたのだ。ソナタ形式による序曲は、劇中のメロディを用いているわけではないが、喜劇としての楽しさや、主人公フィガロやスザンナの聡明さを連想させる音楽になっている。

「恋とはどんなものかしら」は第2幕で歌われる aria。歌うケル

ビーノは10代前半の若い男性貴族で、通常はズボン役としてメゾ・ソプラノが演じる。彼は自分の家よりも位の高いアルマヴィーヴァ伯爵に小姓 (雑用係) として奉公しているのだ。設定年齢からいえば、まだ少年といったところだが思春期真っ盛りであり、どんな女性にも惚れそうになってしまう (実際、戯曲の続編である「罪ある母」では、アルマヴィーヴァ伯爵夫人とのあいだに子をなしてしまうのだ!)。ただ、まだ恋愛経験が少ないため、自分が恋しているのかどうか分からない……そんな心境を歌っている。

14歳のオペラ・セリア ▶  
第1作より

「執念深い父がやってきて」は、わずか14歳で作曲されたモーツァルト最初のオペラ・セリア「ポントの王ミトリダーテ」(1770)で第1幕に登場する aria。ポントというのは、現在はトルコの一部となっているアナトリア半島に紀元前に存在していたポントス王国のことで、ミトリダーテはこの国の王だったミトリダテス6世 (在位紀元前120~紀元前63) をモデルにしている。ミトリダーテは息子2人を試すため、ローマとの戦争で自らが戦死したという誤報を流す。ローマ側について父ミトリダーテを裏切ろうと決心した長男ファルナーチエが「私の心は、父の嘲笑や憤怒に屈しない。父の怒りは私をより残酷に、より高慢にさせるだろう」と歌うのがこの aria である。

[楽器編成(最大)]フルート2、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、チェンバロ、弦楽5部。

### ■ モーツァルト：モテット「アヴェ・ヴェルム・コルプス」K. 618

モーツァルトが1791年12月5日に35歳で亡くなったとき、同年7月に作曲しはじめたレクイエムは未完で残された。「アヴェ・ヴェルム・コルプス」はレクイエムの前、6月に書かれた作品である。オリジナルの編成は混声四部合唱、弦楽5部、オルガン (通奏低音) だが、基本的には合唱と弦楽が同じラインをなぞっているため、独唱や弦楽器だけで演奏されることもある。ラテン語による曲名は「めでたし、真の御体」という意味で、聖体 (聖別されたパンのことで、イエス・キリストの実体とみなされている) への賛歌であり、祈りであるという。

## ■ グルック：歌劇『オルフェオとエウリディーチェ』より 「精霊の踊り」、「エウリディーチェを失って」

継承された  
グルックの改革 ▶

映画「アマデウス」やその原作となった戯曲などを通して、モーツァルトを殺したことになっているイタリア人作曲家で、ウィーンの宮廷楽長だったアントニオ・サリエリ(1750~1825)。だが、これは完全なデマである。実際のサリエリは経済的に余裕のない若き作曲家には、無償で指導するような人格者だった。そんな彼が父のように慕っていたのがドイツの作曲家クリストフ・ヴィリバルト・グルック(1714~87)である。

グルックといえば、1769年に歌劇「アルチェステ」の楽譜を出版した際、歌手の技巧が偏重されたバロック後期のオペラを批判。これが後に「オペラ改革」と呼ばれるようになった。イタリア・オペラに演劇的要素を取り戻そうとするグルックの試みは、モーツァルトに引き継がれ、その精神が見事に反映されたのがダ・ポンテとの3つのオペラだったともいえる。

オルフェウス伝説をもとに ▶

1762年に初演された「オルフェオとエウリディーチェ」は、「アルチェステ」よりも前の作品だが、レチタティーヴォを通奏低音だけでなく管弦楽も伴奏したりと既に改革ははじまっている。「精霊の踊り」は1774年にフランス語版として改訂され、パリで上演した際に追加された楽曲。オペラにバレエの見せ場を求めるフランス・オペラにあわせて、第2幕第2場にバレエのシーンをもうけたのだろう。

「エウリディーチェを失って」は第3幕で主人公のオルフェオが歌うアリアだ。蛇に噛まれて急逝した妻を、愛の女神アモーレの導きによって冥界に迎えに行くオルフェオ。女神との約束だった「地上に連れ戻すまでは妻の顔を見てはいけない」を忠実に守る夫を、事情が分からず怪しんだ妻が責めたことで、オルフェオは妻の顔を見てしまい、エウリディーチェは再び死んでしまう……。悲しみに暮れるオルフェオが自らの命を断とうと歌うのがこのアリアである(オペラ本編では、このあと愛の女神からの救いでエウリディーチェは蘇るのでご安心を)。

[楽器編成]フルート2、イングリッシュホルン、ホルン2、弦楽5部。

※楽器編成の記載ない曲は弦楽5部(一部チェンバロ)。